



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



日本の秋・湯けむりの旅

岩本 智子

11月6日、草津への日口交流バスツアーに参加した。このツアーは、在日ロシア大使館職員と当協会会員との交流を目的とした旅で、30年の歴史がある。服部会長・千葉副会長が長年大使館と交流されていることにより続けられている。

11月4日の国民統一の日(День народного единства)やその前後に行われることが多いが、いつも天候に恵まれる。まだ夏が抜け切っていないような東京を離れ、紅く色づき始めた草津の山が見えてくると秋を感じられた。

大使館の若手外交官のナターリアさんと協会のツアーリーダーの岡崎常任理事がコンダクターとなり旅が始まった。交流に欠かせない通訳係はナターリアさんが務めて下さった。

草津旅行の目的はやはり温泉である。まず温泉街の中心に位置する「湯畑」を見学した。源泉が湧き出ているところに瓦を敷きつめた歩道や展望スペースを備え安全に見学できるように整備されている。辺りは常に湯けむりが舞い上がっていて毎分4000リットルのお湯が流れているとのことだった。力強く沸く源泉を見た上で、大滝之湯に向かった。お風呂につかりながら青空を見あげられる露天風呂は国籍問わず最高のリラクゼーションである。合わせ湯といって、温度の違うお湯が段々に並んでいるところもあった。体温ぐらいのお湯



から少しづつ高温のお湯に移っていき最後は46~7℃となる。体の巡りがよくなり「ととのう」感じがするが、いちばん熱いところはギブアップ者が多かった。チャレンジして浸かっていると何人かロシア人の方も参戦した。1分我慢できたかどうかで上がると一緒にチャレンジした人たちが「お風呂

に入る前より若くなったわ! 美しくなったわ!!」と言うのを聞いてハッとした。温泉という健康増進とか体の不調を治すためというイメージが先に来るが、「美しくなる」のが目的であることを見失ってはいけない。

さらに山を登り、中之条町金井農園というりんご園に向かった。私は初めて木に実っているりんごを取って丸ごとかじる、という体験をした。たった今まで大地とつながっていた実は香りがよく本当に美味しい。お持ち帰り用は有料だがみんな両手にいっぱいりんごを持って帰路についた。

大使館に向かう車中では恒例のビンゴ大会が行われる。私は、毎回ありがたいことにビンゴ係を拝命させていただいている。大小いろんな形のプレゼントはラッピングして何かかわからないようにして選んでもらう。大きいものもいいとは限らない。小さなものが大当たりだったり、ちょっとお高いものはむしろラッピングを地味にしたり、準備をしながら一人楽しんでいる。

通訳をされている小川さんや堅山さん、ロシア語教師をされている中島さん、ロシア語上級クラスの前田さんが参加され、30名のロシア人の皆さんをみんなで案内し交流できた。色づき始めた山や落ち葉が浮かぶ露天風呂、真っ赤に色づいたりんご、日本の秋を満喫した一日だった。

帰って、お土産のりんごをいつものように切って皮をむいて食べて気づいたが、りんごは丸ごとかじった方が美味しいのかも知れない。(常任理事)

お知らせ

●茶道講習会

日時: 2023年12月10日(日) 9:00~12:00

場所: 田町「リーブラ」和室

会費: 1000円

●日本の家庭料理講習会

日時: 2024年1月14日(日) 9:30~12:00

場所: 田町「リーブラ」料理室

会費: 2500円

●茶道講習会(2)

日時: 2024年1月21日(日) 9:00~12:00

●書道講習会

日時: 2024年1月13日(土) 9:00~12:00

* 上記の催しは会員及び会員関係者のみとなります。

* 2024年1月21日(日) 相撲観戦チケット(椅子席4000円)が数枚あります。会員でご希望の方はお申し出ください。

●ロシア語教室生徒募集中!

水曜初級1A-1 (19:00~20:00) 1A-2 (20:05~21:05)

土曜上級 (10:00~11:30) 月曜準中級 (18:00~19:00)

* 見学できますので、事前に事務局までご連絡ください。

お申込み、問合せ: NP0日口交流協会事務局

Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NP0日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。今井亜紅里氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者名: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752 * なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願い致します。



ロシア料理講習会(2)～ハリネズミのハンバーグ～

安部 花子

10月28日、田町リーブラでのロシア料理教室に参加しました安部と申します。今回は通商代表部のアナスタシアさんが企画してくださったロシア料理教室です。11月にロシアへ帰られるとのことで、最後の美味しい思い出作りとなりました。

今回の献立は、ハリネズミのハンバーグ・オリビエサラダ・ブリヌイの三品。タイトルにもあるハリネズミのハンバーグとは、もちろんハリネズミの肉を使用しているのではなく、バスマティライスという細長いお米を表面にまぶしてハリネズミの針に見立てた、豚ひき肉のミートボールです。そして、みんな大好きオリビエサラダ&ブリヌイ！オリビエサラダはジャガイモ・キュウリなどの野菜を賽の目切りにしてマヨネーズと卵であえた、日本食でいうとポテトサラダに近い、ロシアの定番サラダです。ブリヌイとはクレープのようなものですが、クレープほどパサパサしていない、ふわふわモチモチの食感が特徴です。生地自体に甘さはないため、包むものによってご飯にもデザートにもなります。

今回も4～5人のグループに分かれてキッチンに付き、調理開始です。実は私はロシア料理店に行くとき必ず注文するほどブリヌイが大好き。今回のメニューは本当に待ちに待った献立でした。確実に美味しく作るべく、いつも和食料理講習で講師を務めてくださっている小野田先生がいる班へとダッシュ！

ハリネズミのハンバーグは、最初にまぶすときにはお米がペタッと肉の表面に張り付いているのですが、加熱するとお米がハンバーグの上に毛羽立って、ハリネズミの針のようにツンツンと



突き刺さっているではありませんか！フライパンの蓋を取った瞬間、日本人参加者から歓声が上がります。出来上がりをただ食べるのではなく、料理を作るところからやらなければ経験できないサプライズでした。

オリビエサラダはロシアの定番料理なのですが、大晦日の深夜に「運命の皮肉」というラブコメ映画を見ながら、家族みんなでオリビエサラダを食べるのがロシア流の年末の過ごし方だそうで、年末には少し早いものの、年の瀬のワクワクした雰囲気を感じているような気分でした。余談ですが、小野田先生のあまりに華麗な包丁さばきに日本人もロシア人も見惚れてしまい、一時レクチャーが中断してしまうというハプニングも。高級レストランで出てきてもおかしくないほど美しく切りそろえられたオリビエサラダの完成です。

最後にブリヌイ！クレープのようにヘラを使わず、手首の動きだけでフライパンを動かし、生地を円形に、厚みが均一になるよう焼いていきます。まったく自信が無かったのですが、試してみると意外と悪くない出来栄え。「これに抹茶パウダーを加えたら美味しいかも！」との声も。抹茶ブリヌイなんて、ロシアでも日本でもヒットしそうな予感です。

調理終了後、出来上がった料理に舌鼓を打ちお手製コンポート(果物ドリンク)を飲みながら、「次は何が食べたい？」とアナスタシアさん。「次」があることって幸せだし、「次」をつなげていくために、今回のような活動が継続していくことを願ってやみません。

国際放送史研究の戯言No025

書評・青島顕著『MOCT』ソ連を伝えたモスクワ放送の日本人

島田 顕

本書はモスクワ放送の日本語放送に従事した日本人たちを追いかけたものである。主な登場人物は、西野肇さん(第1章)、日向寺康雄さん(第2章)、ムヘンジャン・岡田嘉子さん(第3章)、清田彰さん(第4章)、川越史郎さん(第5章)、岡田敬介さん(第6章)、東一夫さん(第7章)である。異色の人物としては、歌手の川村かおりさんも取り上げている。その他、ここでは紹介しきれないが大勢の日本人が対日プロパガンダ放送に従事し(もちろん従事していたのは日本人だけではない)、それぞれに物語があったのだ。

物語は、著者本人がたまたまモスクワからの日本語のラジオ放送を聞いたことから始まる。日本語放送が当時やっていたロシア語講座のテキストが送られて来て、冊子の匂いを嗅いだところからロシアに対する違和感を覚える。何で、という疑問が浮かんだ。大韓航空機墜落事件、新聞社に就職した後の福岡でのロシア語教室、ミールロシア語研究所に通ったことも。根っこにあった様々な体験、経験が本人を突き動かし、本書に結び付けた原動力となったのだ。

著者と様々な人物との出会いの体験はどれも印象的である。少ない時間でよく聞き出せたと思うほどである。私の知っている人物でも、ほとんど知らないことばかりだった。例えば、日向寺さんとベトナム出身の歌手ルー・フィン・チャウとの関係や、西野さんの「肋骨レコード」も。

主な登場人物たちに加えて、その周りの人たちにも丹念に取材

をしていることが分かる。そうでなければ、豊かで、そして生き生きとした人間の生きざまを再現することはできない。著者の、丁寧に話を聞き、得られた言葉を大切に作る姿勢がうかがえる。また傍証となる材料集めも余念がない。まさに、これぞオーラルヒストリーだ。丁寧さ、強引さ、大胆さ(良い意味で凶々しさ)、そして聞き出す力、観察力、判断力、そして読み手を圧倒する文章力があって、本書は成り立っている。

本書を読んであらためて感じたのは、人は皆、悩み、葛藤を持ちつつも、それなりの人生を歩み続けているということだ。望郷の念、やりたかったこと、やれなかったこと、ソ連の崩壊、報道がプロパガンダか、等々。様々な思いを抱え、大勢の人々がかけはしの役割を果たしてきた。いつの時代でも、かけはしは必要である。かけはしはそう簡単には崩れない。

否めないのは、アクチュアルな書であるという点。ウクライナ・ロシア戦争があったから大きく取り上げられるのかもしれないし、出版に結びついたのかもしれない。だけど時代に埋没させてはならない本だと思う。様々な人々の人生の教訓を知ることができる、誰でも読んで損はない本である。

最後に、本書は対日ラジオ放送の全体像を描き出したのかというと、そうではないと思う。従事した人々でいえば、ロシア人、朝鮮人もいたのだ。だからこそ、彼らにもスポットライトを当ててほしい。続編を期待したいところである。

《モスクワ・アラカルト78》

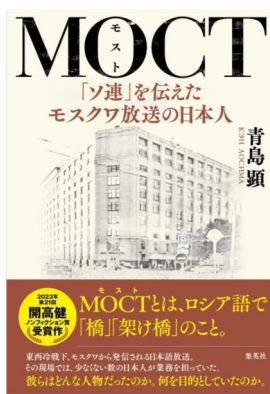
「MOCT (モスト)」(集英社)に寄せて

日向寺 康雄

11月17日、新橋の帝国ホテルであった第21回開高健ノンフィクション賞の贈賞式に招かれた。今回の受賞作は青島頭(毎日新聞記者)著「MOCT『ソ連』を伝えたモスクワ放送の日本人」で、私もできる限り取材に協力し、また私自身についても掘り下げてかなり書いて頂いた。「日口交流」紙からの引用も多い。プーチン政権によるウクライナへの「特別軍事作戦」が続く「嫌口」ムードの中、よく受賞できたものだ。有力候補作には、ウクライナをテーマとしたものもあったと聞く。日本では「プロパガンダ放送」と切り捨てられてきた私達の仕事について、人間的で中立的かつ客観的な視点から、細かな取材によるエピソードを丹念に積み上げ「そこで生きた人間」の存在をリアルに浮かび上がらせてゆく青島記者の昭和流職人芸に脱帽する。

金屏風で飾られた舞台での華やかなセレモニーを見ながら、私は2つの出来事を鮮明に思い出していた。一つは、もう30年近く前になるが、モスクワの日本大使館でのパーティーに出席した折、ある館員から「あなたは、モスクワ放送で働いて恥ずかしいのか?」と言われたこと。もう一つはソ連崩壊直後、特別番組の収録中、私が「これまでモスクワ放送の目的は共産主義のプロパガンダでした」と言った時、それをスタジオで聴いていたレヴィン課長がすかさず録音を止め「『目的の一つは』に言い換えて下さい」と強く求めた事だ。

私達は、ソ連人も日本人も皆「自分達の仕事が両国の架け橋になれば」と本気で願っていた。素晴らしいリスナーにも恵まれた、中学生の頃から60年以上、インターネット放送「スプートニク」に至るまで見捨てず定期的に必ず受信報告と感想を下さり応援し続けてくれた群馬県高崎の「リスナーの神様」鈴木義一さん、私達がピンチに陥った時、いつも有益なアドバイスを下さった「国際短波放送情報」の細谷正夫さん…お名前をあげたらきりが無い。交流協会においては、故坂本斐子常任理事に大変お世話になった。東京支局が閉鎖された時、協会がリスナーからの手紙の日本国内受け取り窓口を代行してはどうかと提案して下さったし、駐日ロシア大使には、最後までエネルギーにモスクワからの日本語放送再開を訴え続けて下さった。



こうしたかけがえのない方々がいらしたおかげで、今回「MOCT (架け橋)」が他でもない今、深いメッセージ性をもって、この世に出たのだと、つくづく思う。すでに元NHKディレクターの馬場朝子さんからは、嬉しいメッセージを頂いた。「本読みました。いろいろとても懐かしく思い出しました。日向寺さんがやってきたことが歴史の中でしっかり評価され、記録されたことがとても嬉しいです。良かったです。いつロシアへ戻りますか?」

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大&早大非常勤講師)

ラ ジ オ

キタヤマ 忍

家で過ごすことが多くなる季節になりました。テレビやインターネットを見る時間が増えがちですが、ラジオをかけながら過ごすのはいかがでしょうか?今はアプリで世界中の放送が楽しめます。もちろんロシアや周辺国も例外ではありません。

FM、AM、オンライン局、コミュニティ局と大小形態は様々。その地域のトレンドを知るだけでなく、遥かなる人々の存在をリアルタイムで感じられるのが魅力です。私の

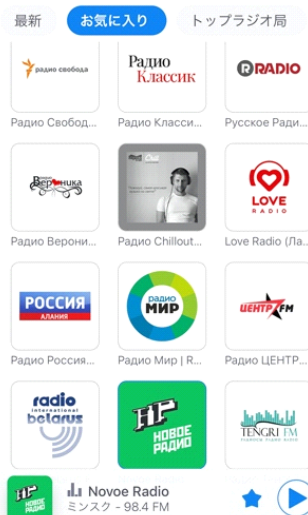
お気に入りには現地時間朝6時から10時くらいの時間帯。トークや音楽のバランスが良く、日本とはまた違う生き生きとした展開が特徴的です。日本の深夜帯はしっとり、朝は適度に明るいトークや曲という傾向にあります。海を越えると深夜もノリの良い曲が流れ、朝日と共にカーテンを一気に全開にするような「おはようございます!今日が素晴らしい1日であるように、この曲からスタート!」ズコズコズチャ

チャ。軽快なトーク、天気、占い、ニュースそして賞品をかけた「クイズコーナー」。しかもリスナーに電話を繋ぐのが定番で、曲当てや国語(ロシア語)、時事問題となかなか難しい。電化製品やオンラインショップで使える高額クーポンと豪華賞品がチャレンジ心をくすぐり、朝の忙しい時間とは思えない熱い挑戦が日々繰り返されているのです。初めはその番組だけかと思っていたのですが、あちらもこちらもクイズコーナー。

もう一つ注目したいのはCMです。全国区と地域、社会の動きが反映されるCM。ウクライナではこの局面で一時防弾チョッキや避難幹旋業者など戦闘に関係するCMのみになりました。ベラルーシでは今年もブラックフライデー、ロシアでは日本関連のCMは減ったけれど消えてはいません。ドラマ仕立ての演出など語学が苦手でもわかりやすいものが多いのでリスニングの練習にもなりそうです。

ロシア国内の時差は10時間。YouTubeでスタジオのライブ配信をしながらの「見えるラジオ」番組もあります。ロシア国外のロシア語放送局ではルーツやファン性など異なる角度からロシア文化に触れられるかもしれません。

今時は遅い日の出に暗くて寒い朝。ラジオの明るい声が流れるキッチンでおかしな回答にクスリと笑い、静かにコーヒーを飲む。どこにでもありそうな朝を時間差で共有しているような気がするのです。(ビデオグラファー)





「ロシアンカ」がふれあい祭りに参加

岡崎 好典

大使館付属学校の「ロシアンカ」は、2023年10月22日(日)に近所の麻布区民センターで開催された「第36回麻布区民センターふれあいまつり」に4年ぶりに参加し、ロシアの歌と踊りを披露しました。

当協会によるこの参加支援業務は、かつて、故坂本斐子常任理事が担当されていたもので、私が後任として数回にわたり徐々に引継ぎを受けているところでした。それがたいへん悲しいことに、坂本常任理事が昨年1月に急逝されたため、よくわからないところがありましたが、5月からオリガ先生や区民センターのスタッフのサポートを受けながら準備を進めてまいりました。

今回は、これまでと異なり、このまつりのプログラムを生徒に事前に配付したこともあって、生徒32名に対し、親御さんが25名ほど付き添ってくださったうえに、麻布警察の署員も複数で見守ってくださったので、安心して参加することができました。このように親御さんが多数いらしたうえに、例年よりはるかに多い日本人の観客が来場されたため、175の



座席の7割ほどが埋まりました。仕事柄、人前で話すことに慣れているべき私ですが、多くの観客の前でスポットライトを浴びたこともあり、冒頭の舞台挨拶では少し緊張しました。

「ロシアンカ」の出演は20分ほどではありましたが、4年ぶりに披露した歌と踊りに会場は盛り上がり、観客からは温かい声援と拍手が送られました。現在の世界情勢から、「ロシアンカ」が観客に受け入れてもらえるか、開演前までは正直、不安がありましたが、温かく受け入れてもらい安堵しました。

今回は、主催者から「ぜひ参加してください」とのオファーがあったため、参加することといたしました。参加を許可してくださった校長先生、そしてオリガ先生、生徒の親御さん、区民センターのスタッフ、協会の関係者のみなさんに心から感謝を申し上げたいと存じます。坂本常任理事も喜んでくださっているとよいのですが。(常任理事)

ホワイト・クリスマス

畔上 明

12月ともなると街角のあちこちからクリスマス音楽の心躍るメロディーが聞こえてきます。クリスマス・ソングの中でも、第二次世界大戦のさなかビング・クロスビーによって歌われ、今でも歌い継がれている「ホワイト・クリスマス」は、そのルーツがロシアであると言ったら、驚かれるかもしれません。

1942年の映画「スイング・ホテル」(原題: ホリディ・イン)は、フレッド・アステアのダンスとビング・クロスビーの歌唱で楽しませてくれますが、その中で紹介された「ホワイト・クリスマス」を作詞作曲しアカデミー歌曲賞を受賞したアーヴィング・バーリン(1888-1989)は、ロシアで幼少時代を過ごしたユダヤ人です。本名はイズライリ・イシドール・ベイリン、父親モイセイ(1848-1901)は当時ロシア帝国であった現在のベラルーシ東部モギリョフより北北東82kmトロチンにあるユダヤ教シナゴグのハザーン(礼拝の祭司)でした。母レヤ・リプキナ(1850-1922)との間の子沢山の大家族として西シベリアへと移り住み、やはりユダヤ人が多く暮らすチュメニで8番目の末っ子としてアーヴィングが生まれたのでした。

生後間もなく、チュメニから840km東北東の村トボリスクに引っ越したこともあり彼自身は後年トボリスク生れであると語っていたようです。

「屋根の上のバイオリン弾き」にも描かれているように19世紀末ボグロムが激しくなっていたため、一家は1893年9月にアメリカに移住、ロシア、東欧の移民の多く住むニューヨークのロウアー・イーストサイドでの生活を開始し



ます。同様の人生を歩んだ人たちの中にはジョージ・ガーシュイン(1898-1937)の父サント・ペテルブルク出身のモイシャ・ガーショウィッツ(1872-1932)、MGM設立者の一人ルイス(ラザール)・バート・メイヤーやワーナーブラザーズ4兄弟などいますので、ハリウッドはそのような人材に満ち溢れていたのです。

ガーシュインからは「アメリカのシューベルト」とも呼ばれたアーヴィング・バーリンは正式な音楽教育は受けていませんでしたが、十代後半より作曲を始め、1911年に最初のヒットとなった「アレキサンダーのラグタイム・バンド」、1918年第二の国歌と言われる「ゴッド・ブレス・アメリカ」、1927年「ロシアの子守唄」、1933年「イースター・パレード」、1935年「トップハット」、1946年「アニーよ銃をとれ」の中の「シヨウほど素敵な商売はない」など数々の名曲を生み出したのでした。1962年に引退するまでに20ものミュージカル舞台、15本の映画の音楽を含む1500曲もの作品を世に送り出して、1989年に101歳の生涯を終えました。

なお、ハリウッドで映画音楽を作り続けたディミトリ・ティオムキン(1895-1979)はサント・ペテルブルク音楽院で学んだウクライナ人、俳優カーク・ダグラス(イーセル・ダニローヴィチ)(1916-2020)の両親はベラルーシのモギリョフ出身、ナタリー・ウッド(ナタリヤ・ニコラエヴナ・ザハーレンコ)(1938-81)は父がウラジヴォストーク、母がバルナウル出身、レオナルド・ディカプリオ(1974-)は母方の祖母エレナ・スミルノワがロシアからドイツへの移民、シルベスター・スタローン(1946-)は母方の祖父母がオデッサからの移民と、そのルーツには興味が尽きません。